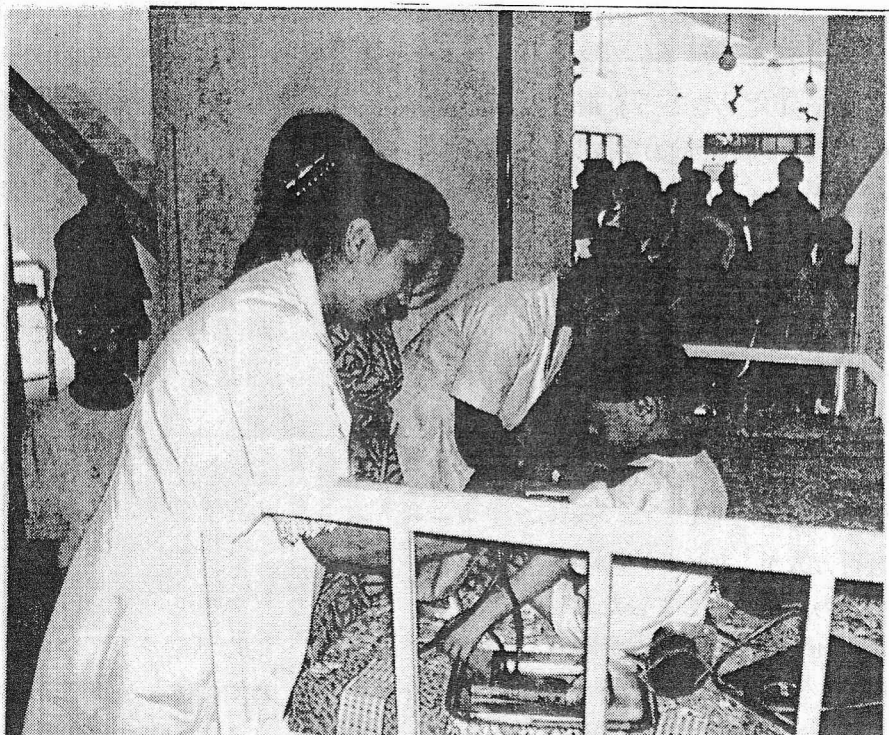
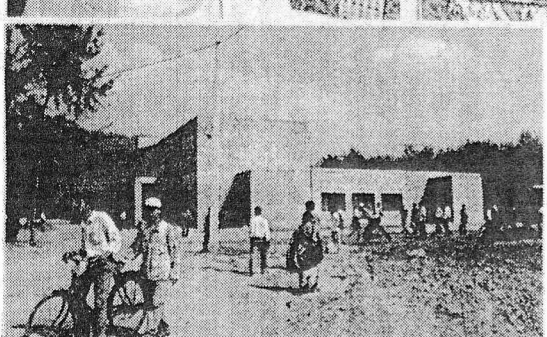
国境超え医療支援の輪





「子ども病院」診察始まる

ネパール

ネパール南部のブトワル市郊外に毎日新聞、毎日新聞社会事業団とAMDA（アジア医師連絡協議会、本部・岡山市）の連携でつくられた「ネパール子ども病院」＝写真下＝で診察が始まった＝同上。初日の3日は診察開始予定時間前から約50組の母子が待ち受け、地元の病院に寄せる期待の大きさをうかがわせた。【ブトワルで藤原健、写真も】

ブトワル市は病院の開所式が行われた「11月2日」を「病院の日」と決め、今後、日本の子どもたちとの交流も深めることにした。

4日までに診察を受けたのは、計約200組。医療スタッフは、ネパール人と日本人の混成で、医師3人と看護婦、検査技師約10人。

病院は世界的な建築家、安藤忠雄さんの設計だが、高い天井、採光を重視した内部は、ネパールの他の病院にはない明るさで、ある母親は「こんなにきれいな病院で診察を受けられるなんて夢のよう」と話した。

病院運営には地元も全面協力しており、管内の各小学校から生徒1人当たり1ルピー（約2円）単位の「積立金」を集めて「自分たちの病院」にする施策など、さまざまな方法で地元独自のかかわりを展開する予定。院長のラメシュワル・ポカレル医師は「国境を超えて多くの人の支援を受けた病院だけに、親切、丁寧な診察を続け、子どもの命を救うことで、街の発展にも寄与したい」と抱負を語った。